
件の九段

明石 凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

件の九段

【Zコード】

Z2503F

【作者名】

明石 凪

【あらすじ】

自称「ゴーストバスター」「魅斗」不可思議な体質の主人公「依喪」それから、彼らが出会った『恐怖』たちの嘶。

階段を見上げて／てげ上見を談怪

階段を見上げて／てげ上見を談怪

学校の怪談というフレーズを聞いて学校の階段と脳内変換し、一
体全体階段の何が怖いんだ、こんなもの全然怖くないじゃないか、
と思っていたのは僕だけじゃない筈。

そしてある日突然、自分の致命的な過ちに気付く。すなわち、そ
もそも階段なんて怖いわけがなく、階段だとと思っていた単語は階段
でなく怪談であり、怪しい話が、怖いんだ。

僕がいいたのは、なにも、人間馬鹿だと損をする、なんていう話
じやがない。話したいことは簡単な概念で、人間は怖いかどうかを
判断する能力を持つてているということ。

階段は怖くないけど、怪談は怖い。そのところの判断基準を明
確にせずとも、いやむしろ、明確にしないからこそ、怪談は怖い。
僕たちはそれを知っている。

恐怖は本能の一部だ。

人は恐怖を恐れる。

けれど、考えてみてくれたらわかるんじゃないだろうか。

もしもあなたが朝、学校でも会社でもどっちでも良い、むしろそ
こから帰つて家族にでも会つたとき、もしくは同級生と街で偶然出
会つたとき、そのときにもし、もしもだ、怖がられたら、どうする
だろうか？

「君、すごく、怖い。」

そう言われたら、あなたはどうする。暖かい抱擁で迎えてくれる、
自分の存在を許容してくれる、自分ことを知つてくれる、自
分のことを見ていてくれる、そんな存在が自分を見る目は、恐怖色
に染まっていた。

それって、怖いことじゃないだろうか？

怖いといふことが一体どういふことを表すのかなんて全く問題じゃない。問題は、怖いといふことは何も一方通行とは限らないということ。

けれど勘違いはしないでほしい。そもそも、怖いやつらは、あなたは僕を怖いとは思っていない。あなたや僕がよく知っている知人を怖いと思わないのと同じで、普通は彼らも僕らを恐れない。

ならば彼らは何を恐れるのか。

恐怖には一つある。災害を恐れる恐怖と、崩壊を恐れる恐怖。つまり、何が起こるか分からない恐怖と、それが起こってしまえば全てが失われる恐怖。自分の体や心が破壊されるかもしれない恐怖と、自分の思想や主張が破綻してしまうかもしれない恐怖。

僕たちが僕たちの破壊を恐れるようだ。

望んでも叶わないということを、彼らは恐れる。
あなたや僕が恐れる恐怖たちも、

本当は、

怖がられるのを、恐れている。

心靈寫眞／心写靈眞

壹

「あのう……、」

背後からの声に、僕は振り返った。そこに立っていたのは、黒髪ツインテールの小柄で可愛い女の子。廊下の真ん中にいて、申し訳なさそうな目で僕を見ている彼女は、僕の知らない子だった。

「何？　僕、なにかしたかな？」

首を傾げて、少女に答える。

「え、あ、いえ。そういうわけじゃないんです。その、あの……どうしたんだろう？」

「言いたいことがあるならわざと言つてほしいな。早く家に帰りたいんだけど？」

既に放課後。今日は花鉈に借りた『首切り女子高生とハムスターのモヘ』をプレイする予定だから、楽しみにしているのに。「えっと、ですね、」お、意を決したらしい。覚悟を決めた人の表情をしている「その、わ、私と、屋上に行ってくれませんか！」

……。

僕は数秒悩んだ。

「やだ。」

この女の子と屋上に行くことよりも、『首切り女子高生とハムスターのモヘ』をプレイする方が先だ。僕の脳はそういう結論を出した。

女の子は鯉が本当に滝を登ったのを見た人みたいに驚いて、そしてあたふたし始めた。

「え、ええ！？　どうしてですか！？　私みたいな可愛い女の子が

屋上みたいな人気の無いところに行こうって誘つてるんですよ？健全な男の子なムフフな展開を期待してOKするものでしょうが！」

そして何故か怒られた。

しかもこの女、自分で自分を可愛いって言いやがった。たしかに可愛いけどさ。

「んー、でも別にムフフな展開がある訳じゃないでしょ。良いところで告白、普通でカツアゲ、悪くてサンダバック。おーコワ。」

「私はそんなに酷いことをしたりしません！ どちらかといつとされる方が好みです！ ジゃなくて！」

じゃあなんだよ。

ドM発言はスルーしてあげる僕だった。

「細かいことは考えずに私と屋上に来なさいー。」

「はあ……。まあ、別にいいけど」

僕は仕方なくそう言つた。もう正直に言うとめんどくさかった。

僕たちは廊下を歩いた。もう時間も遅いので、人はいない。

そういうえば、この子はなんでこんな時間までこんなところにいたんだろう。僕に用事があるなら、放課後になつてすぐに教室を訪ねて来ればよかつたのに。

「そういえば、なんで屋上に行くの？」

僕は隣を歩く少女に尋ねた。

「んー、それは、行けば分かります。」

「ふうん。まあ、良いけど。屋上で男子と一人きりになつて大丈夫なわけ？ 彼氏とか、いないの？」

「セクハラで訴えますよ？」

「なんでじやい。

「まあ、でも。彼氏はいないのでその心配はないです。」

「そなんだ？」

意外だった。姿勢を考えれば、モテそうなのに。

「彼氏が出来ても、なぜか、すぐに行方知れずになっちゃうんですよ。」

……いや、普通ならないって。どんな彼氏だよ。ヤクザか？ ヤクザなのか？

「だから、彼氏は作らないことにしたんです。というより、誰も私に寄り付かなくなつたんですけど。呪いの女、とか言われちゃつて……」

少女はそう言って苦笑した。悲しそうに見えた。

屋上に向かう階段を登り切り、鉄製の重たい扉を開けた。女の子を通して、僕も屋上にでる。

夕焼けが眩しかつた。

屋上には何者かのシルエットがあつた。背が高く、スレンダーな美人を連想させる。ウエイトレスのように、腰に手を当てて、反対の手を掌が上を向くようにしている。

「……なにしてるんだ？ 魅斗。」

「えつと、呼んで来ましたよ、魅斗さん。」

隣の女の子がそんなことを口走つた。

「いっ、魅斗のパシリだつたのか……。」

「ありがとう、沙織さん。私の下僕を呼んで来てくれて助かつたわ。それじゃあ、もう大丈夫よ。行つても良いわ。なに、あなたの悩み事は私のこの下僕が解決するから、心配いらないわ。まかせなさい。それじゃあ、またなにかあつたらメールして頂戴ね。私たちからあなたに連絡することはあまりないとは思うけれど、もし必要だつたら何らかの方法で連絡をとるから、大丈夫よ。なにか質問はあるかしら？」

シルエットは夕日に向かつたままそう言った。

「いっ、絶対、自分のことを、かつこいいとか思つてる。」

「ナルシストは嫌いだ。」

「いえ、特に無いです。えつと、それじゃあ、いろいろ聞いてくださいつてありがとうございました。失礼しますね。」

そう言って、彼女はペコリと頭を下げた。

「あ、依慈亞くん。またお話ししましょうね」

去り際にそんな言葉を残して、屋上から出て行った。

「なんだ？ 依喪、もうあの子を落としたのか？」

「人をジゴロみたいに言つなよ。別に、何もしてないわ」

僕はそう言いながら、シリエットに近づく。

「大体、僕を呼ぶならメールでもすれば良いだろ。」

そこで僕はハツとする。

なんと、そいつはハリボテだった。

「……」

愕然としてしまった。

「ハツハツハ！ 驚いたかい、依喪！」

屋上のドアが開いて、魅斗が現れた。

黒くて長い髪を、ポニー・テールに纏めている。まさしく尻尾のように見えるその髪は、彼女の腰に届いていて、獣の様な眼光と相まって、彼女の存在を誇示している。

僕の後ろにいたらしい。

隣にあるハリボテを見ると、スピーカーが付いていた。ここから声を出していたのか。手の込んだことをしやがる。

「……それで？ 何の用？」

「ああ、うん。用事つてのは簡単でな。うん、そうだな、何から話そうか……。」

「ハリボテ作る暇はあつたんだよね？ だつたら、説明の手順くらい考えておいてほしいもんだね」

「お前相手に説明の手順を考える時間なんて無駄だと思ったからさ。どうせお前は私が何かを考えている間中、注ケンは遅行よろしく待ち続けるに決まっているからな。」

ケンって誰だよ。というか、それを言つなら忠犬ハチ公だ。
アッシュとダブルヴェを間違えるな。

「まあ、別に良いけどね。」

僕は屋上の手すりに寄りかかった。魅斗は腕を組んで、悩んでいる。

「ああ、そうだ。うん、依頼、あの女の子の名前は帚木沙織といつだけれど、彼女のことなどをどう思つた?」

「どう思つたって言われても。

「そうだね……、僕い印象の女の子だと思つたかな。なんだか、孤独、それ以上に、人と違つ場所にいるよつて思える。」

「それだけ?」

「それだけだよ。まだ会つてすぐだしね。」

僕がそう言つと、魅斗は首を傾げた。

「彼女と同じクラスじゃないのかい?」

「ああ、」そうか、クラスメイトだったのか。だから、初対面ほどには警戒してなかつたんだ。「うん、そつらじいね。言われるまでわからなかつた。僕はクラスメイトの顔や名前は記録してないから、よくわからんのだよ。」

「どうして記録しておかないと? 困らないのかい?」

「別に困らない。もともと、一緒にいて得をする連中じゃないしね」

ふうん、と、魅斗は頷いた。

「それじゃあ、それはそれで良いとしよう。とにかく、あの女の子が私の所に来た理由は推測できるかな?」

魅斗を訪ねる理由。

それは、つまり、なにか『おかしな話』に遭つてしまつたということ。

「なにか、変な体験でもしたのか? あの、沙織ちゃんだけ。」

僕がそういうと、魅斗はニヤリと笑つた。

「そつらじい。じつやらね、彼女を写真に撮ると、心靈写真になつてしまつことがあると言つんだ。これについてはどう思つ?」

「んー。心靈写真つて、つまりそれは、ただの変な写真だろ? いつも同じカメラを使ってるなら、レンズに汚れが付いてるかなんかだと思うけど。それか、パソコンで写真を加工してるとか。どのみち、信憑性は薄いな。沙織ちゃん、なんかに呪われてるみたいな空気じやなかつたし。変な話は聞いたけどね。」

恋人が行方不明になる、だっけか。

まあ、恋人って言つても、二、三人程度だろうし、その程度だったら、偶然で済ませられるだろう。別に、怪異じやない。

「そう、心靈写真じやない。私も最初はそう思つたさ。けれど、これを見てくれ。」

魅斗はそう言つて、四角いものをこっちに投げて寄越した。僕はそれを受け取る。

それは、輪ゴムで束ねられた数枚の写真と、手帳だつた。僕は輪ゴムを外し、写真を順番に見ていく。

一枚目は、沙織ちゃんと僕の知らない女の子が一緒に写っている写真。たしかに、沙織ちゃんの腕が見えないし、腕だらけの幽靈が背後に写っている。ピクニツクか何かだろうか、お洒落をしているというよりは、動きやすい服装といった感じだ。場所も、どこかの公園のようだし、幽靈の手じや かない手も見えるし、周りに人がいるんだろう。

二枚目は、男性と二人で映つている。おそらく彼氏だろう。今はいないつて言つてたから、元彼氏、か。水族館みたいな場所だ。記念撮影ができるパネルの前に立つて映つている。回りには通行人が見える。沙織ちゃんの足元に、苦しそうな顔をしている幽靈が四五匹、映つている。水が多い場所だから、多く写つたんだろう。

三枚目は、これは……、一年生の時に学校行事で行つたキャンプの時の写真だ。沙織ちゃんと、他にも何人かの女の子が移つている。そして、その部屋の壁に掛けてある絵の中に幽靈が写り込んでいた。恨めしそうに彼女たちを見ている。そういうえば、心靈写真があるつて噂になつてたっけ？

「……えつと、本物ですね。」

その判断は感覚だ。それから、経験。僕はこれでも人間じやないので、それくらいはちゃんとわかる。

「なんだよ。だから、困つてる。」

やれやれ、といった風に魅斗はため息をついた。

「まったく、しかもだ、見てくれればわかると思うけれど、どれも別の幽霊なんだよ。つまりおそれく、彼女は、幽霊吸着体质ということだ。」

「……。それって、本物がいたんだね。彼女自身に靈感はあるの？」
「いや、無い。皆無だ。こんな写真が撮れることに心当たりはあるかと聞いてみたのだけれど、無いらしい。見えたり、聞こえたりもしないそうだ。つまり、完全に、幽霊を呼ぶ『だけ』の体质なんだ。」

「幽霊吸着体质。幽霊が現れたくなるような性質でも持っているんだろうか？ 原因がよくわからない。」

僕はもう一度、三枚の写真を見比べてみた。どの幽霊も、苦しそうな表情をしている。いや、一枚目の手だけの奴は表情がわからんないんだけどさ。

「……でも、こういう風に写真を撮つてると、毎回幽霊が写り込む訳じゃないよね？」

「うん？ どういう意味だ？」

魅斗は首を傾げた。

「んー、毎回幽霊が写るなり、単純に写真が嫌いになるんじゃないかなと思って。でも、これを見れば、普通に写真を撮つてる。特に『撮影を怯えている様子』が感じられない。つまり、必ず幽霊が写り込むつて訳じゃないつてことになる。実際、学校行事の写真で彼女が普通に写つてるのを見たことがあるしね。」

まあ、そもそも幽霊なんてそんなにたくさんいるもんじゃないんだけど。それを差し引いても、必ず写るとは限らないつてことは、別に憑かれている訳でもないんだろうじ。

憑かれていたら、必ず毎回、同じ幽霊が写り込む。けれど、そうじゃないということは、強すぎる吸着体质ではないということじやないんだろうか。

それに、彼女自身からは幽霊に好かれるような気配は感じなかつた。

「ふむ、なるほどな。確かにその通りだ。」

「気付いてなかつたのか。僕は思わず脱力した。

「ゴーストバスターならそれくらい思いつけよ……。魅斗、一応本物なんだよね？」

「アハハ！ 細かいことを気にするなー。禿げるぞー。」

それはいやだな。

「まあ、どちらにせよ依頼に相談したのは早くも正解だったという訳だな。まあ、とりあえず、だ。今回の彼女の頼みことは、この心靈写真をどうにかしてほしこうていうものだ。」

「うわー。メンドクサ。

「もう『やら』ないよつにってこと？ んー、そもそもそれって体质なんでしょう？ どうにかしろもくそもないんじやないの？」

「そうかもしねない。でも、調べてみる価値はあるさ。もしかしたら、彼女に何かが憑いていて、その靈の仕業かもしねんしな。」

……いやな言葉を聞いたな。

「その、一応確認しておくんですけど。依頼を受けたのは魅斗だよね？」

「いや、違う。私とその奴隸だ。」

奴隸つて誰だ。

「僕を巻き込まないでくれ。」

「その件については、すでに時遅し、と答えるしかないよ。まことに残念ながらね。」

この野郎。

本気で殴つてやろうか。

「つてことは、どうせ今回も俺が動くんだけよな……。まったく、江本さんになつた氣分だよ……。」

「江本？ 誰だそれは？」

「ん？ ああ、大学生の知り合いだよ。変な力を持つてる人。なんか、怖いものが見えるんだつてさ。高校の時、トラブルショーターをやってたらしいよ。」

「怖いものが見える、か。なかなか面白い力だな。まあ、私にも似たようなものがあるのだけれどね。」

無い胸を張つてそう言つ魅斗。なんだか説得力が無いのだけれど。「まあ、その能力とやらは置いといて。結局、どうすればいいの? 調べるつたつて、方法が無い。」

「うん、そこでだ。こいつを貸してやろ!」

そう言つて、魅斗は鉛筆くらいの細長い筒が七個束になつた物を、ポケットから取り出した。

なんだそれ。

「ほら、生モノだから氣をつけて扱え。」

そう言つて筒の束をこちらに投げて寄越す魅斗。知るかよそんなもん。

受け取つて、見てみる。七個の筒は六角形になるように配置されていて、真ん中の筒の両端には、丸くて透明な石がはめ込まれている。中を覗いてみたら、変な文様が見えた。

……。文様が光つてやがつた。僕はとっさに眼を離す。

「これ、なんて名前のアヤシイアイテム?」

「名前はまだない。私の自作だからな。」

めちゃくちゃあぶねえ。

「周りの六つの筒に蓋がしてあるだろ?」

言われて、僕は手元のアヤシイアイテムに目を落とした。若干引き気味に。

「その筒は開くようになつていて、中には管狐が入っている。」

妖怪じょねえか。

いや、管狐は妖怪じょないつけ? 使い魔?

……問題はそこじょなかつた。

「小さいものだけれどな。この間の火事で依喪に妖怪を扱う能力があるらしいことがわかつたから、その子たちとも相性が良いだろ?」

「

相性なんて良くなくて良い。あれ、良くなくて良いつて否定なの

か肯定なのか判らないね。新発見だわーい。

いかん、脳内テンションがおかしい。こうじうのつてテンパつて
るつて言つんだよね。

「じゃあ、この真ん中のアヤシイ文様は何だ？ なんか光ってるん
だが。」

「ああ、それは管狐を生み出すための呪だ。」

「そんなもんあるのかよ！」

「うん。言靈つてそういうものだし。もともと、管狐は自然発生す
るから、それを促す作用があるだけなんだが。そこで、生み出され
た管狐はその管に空きがあればそこにに入るのさ。周囲にいる管狐を
捕まえることもできる。んで、ほら、周りの石を見てみな。」

「石？ あ、確かに。」

回りにある細長い管に、中心から向かって外側になるように向け
て石が埋め込まれている。ひとつだけ白く、薄く光っていて、あと
は暗い。

「なんだこれ？ 窓かなんかか？」

「それは、中に入ってる管狐の感情や靈力を表してる。靈力は自然
と回復するが、感情が自然と回復するかどうかはわからんな。感情
だし。捕まえた管狐だと、怒ってるかもしれないし、天狗の使いだ
と、天狗がやつてくるかもしない。まあ、気をつけることだ。」

「んー、天狗には勝てないかな。」

「まあ、がんばってみるよ。」

僕はそう言ってため息をついた。

魅斗はさつさと屋上を出ていく。

振り返ると、夕焼けはどこかに去っていた。

夕焼け。この夕焼けは、毎日訪れるのに、この夕焼けを見る僕は、
どうしてこの瞬間にしかいないんだろうか。

毎日が、平穏で平和な毎日が、延々と繰り返されることとは、そん
なに退屈だろうか？

僕は、写真を見た。

写真を撮る人の気持ちが、少しくらいわかる気がする。そして、きっと、沙織ちゃんにもわかるんだろう。沙織ちゃんには、わかっているんだろう。

だから、写真を撮るんだ。

何かを残したい人がいて、その想いを台無しにしたくはないから。そうだとしたら、それはちょっと、僕に似ている。
怖くても写真を撮りたい。たまに撮れてしまつ心靈写真を無くしたい。安心して写真に写りたい。
そういうことなんだろう。

心靈写眞／心写靈眞 武

心靈写眞／心写靈眞

武

僕は家に帰つて、写眞を調べていた。タイルカーペットにホワイトのデスク。いくつかのコンピュータ。今走らせているのはMacだ。ブラックのボディのMacBook。写眞をスキヤナで取り込んだ。それを三つならべて、見比べている。

魅斗に預かった写眞を調べていてわかつたことがある。それは、写り込んでいる幽靈がどれも間違えなく別のものであるということ。さらに、それら幽靈に一切共通点が無いということ。おそらく、浮遊靈を捕まえていることになる。

幽靈を引き寄せても、幽靈に憑かれていない。不思議といえば不思議だ。いや、これはむしろ変だ。

幽靈は基本的に孤独だから、理解者を求める。
生きていた時から、孤独だった。
だから、誰かに自分をわかつてほしくて。
その想いが強すぎた。

消え去らない幽靈になつていく。

そんな幽靈が、自分の存在に反応する彼女の体質に気づいて尚、彼女に憑かないといふのは、不思議だ。

「んー、沙織ちゃんの家に、靈能者でもいるのかな。それか、土地神か、なんか強い幽靈か。」

あまり想像できないけど、それでもないと説明がつかないのも事実……。

たとえば、この写眞が撮れた直後は幽靈に憑かれていたんだと仮定しよう。これは自然なことだ。

沙織ちゃんの肉親の誰かが靈能者、それも、簡単な幽霊であれば徐霊できる程度の能力を持つているとする。そうすると、沙織ちゃんに気付かれないように徐霊し続けていたんだと考えれば、毎回写真に幽霊が写らないつまり、沙織ちゃんが憑かれていない理由が説明できる。

もしくは、沙織ちゃんの家に土地神や、ほかの強力な思念体があれば、それらの力に浮遊霊が耐えられなかつたということも考えられる。人間でも、強いプレッシャーに耐えられないように、思念体である幽霊も同じものだ。

けれど、どうも違う気がする。

「うーん、なんというか、沙織ちゃん、なにかまだ秘密にしてることがあるんじゃないかな……。」

この予想は多分正解だと思う。

一度憑いた幽霊はその日一日、少なくとも家に帰るまでは離れないとということになる。見せてもらつた心霊写真のうち一枚は、学校行事でキャンプに行つたときのものだ。あまり記憶していないけど、沙織ちゃんが写つた『普通の写真』は他にもあつたはず。

それに、最後にみんなで撮つた集合写真には、幽霊が写り込んでいなかつたように思う。集合写真は、クラス全員に配られた。僕も持つていた。捨てたけど。

クラスメイトが騒いで無かつたから、やつぱり心霊写真ではなかつたんじゃないかと思つ。

カタ、

管狐の筒が揺れた。狐はいつの間にか二匹に増えていて、僕は少し驚いた。どこから捕まつて來たんだろうか。

僕は筒を持ち、二匹を外に出してやつた。

スルリ、

二匹の狐は筒の外に出て、僕の前に浮かんだ。主従契約を結んだ訳でもないのに、律儀なんだな、と思つ。

「お前たち、言葉は使えるのか?」

僕がそう言つと、一匹の狐はよくわからない鳴き声を上げるだけで、答えなかつた。

言葉は使えないのか。

どうやって意思疎通するんだよ。

「まあいいや。ほら、お前、もう戻つていいよ。」

片方の狐に目を向けてそう言つと、どうやらこちらの言葉は解るようで、素直に管に戻つていつた。

「よし。」僕は狐の筒を持ち、残つた一匹に視線を向けた。「ちょっと散歩にでも行くか。」

僕はMacBookを閉じた。

狐は素直に僕に着いてきた。いや、憑いてきたと表現した方が正しいのかもしれないけれど、それはまあ、細かい話だ。

外に出ようと思った理由は簡単で、この狐を連れていたらどうなるのかを実験してみたかっただけだ。それから、この狐との意思疎通を図らないといけない。

僕と狐は部屋を出た。階段を十三段下りて、それから玄関を出る。四車線の道路の上を横断している橋を渡り、それから、小さな公園に入った。僕の家の前はかなりうるさい。自動車なんてなくなればいいのにな。

錆びついて揺らすと軋んだ音を立てるブランコ。塗装が剥げて可笑しな色をしているすべり台。腐りかけた木で組まれたベンチ。雨にさらされて硬くなつた地面。風に吹かれ続けて大きな砂粒しかのこっていない砂場。螺子が取れて棒が回転するようになった鉄棒。まるでこの場所がガラクタになつてしまつたみたいな、そんな風景。

ずっと昔は、僕もここで、普通の子供と同じように遊んでいたのに。その思い出はもう、ここには残つていない。

「写真でも撮つてたら、その思い出も残つてたのかな。」

けれど、その写真すら、この公園のように色褪せていくもののな

に、どうして、写真を残すことに意味があるんだろうか。

「写真を残したところで、色褪せた昔を見たところで、それがただの色褪せた昔である以上、この公園をもう一度見に来ることと、写真を見返すこととは、何も違わないと思つるのは僕だけだろうか。きっと僕だけだろう。

そんな冷めた感触で、世界に触れているのは。

狐が僕に寄り添つた。意外なことに、こいつは温かかった。

僕はブランコに座つた。公園の固い地面。その向こう側は、もつと硬いコンクリートだ。フェンスの向こうに細い道と、その向こうには小さなビル。ぐちゃぐちゃに灰色な町の、茶色く錆びた一角。どうしようか。写真はおそらく、というより何度も確認したけど、間違えなく本物の幽霊だ。

だとしたら、写り込んでいた幽霊たちが今どうしているのかを調べるくらいしか、やることが思い浮かばない。調べること自体は樹裕にでも頼めばいいんだけど、そうすると、僕が暇だ。

いや、暇でも良いんだけどさ。頼まれた以上、なにかしたいし。

……そうだ、水族館。

あの三枚のうち、一枚は水族館だ。そこで映つた靈は数が多くつた。水周りだから靈が集まつたんだろうと思つたけれど、果たして本当にそうなのか。

つまり、あの幽霊は本当にあの場所に居た幽霊なんだろうか。一度足を運ぶ価値はあるかもしない。

……ん?

僕は一つ気付いた。というより、どうして今までそれに気が付かなかつたのか、それが不思議でたまらない。

「魅斗は管狐を捜査に使えて言つたけど、管狐をどうやって使つんだ?」

「というより、こいつ、何ができるんだ? 誰かを病気にさせるんだっけ?」

……使えねえ。

心靈写真／心写靈真

参

翌日は朝から雨だった。憂鬱な気持ちにならながら、体を起こす。それから制服に着替えて、階段を十三段、降りた。玄関の前を通して洗面所に向かう。顔を洗って、歯を磨いた。

リビングに行くと、母さんが食事の用意を済ませてくれていた。僕はテーブルについて、手を合わせてからそれを食べる。書き置きがあった。

『虫食い穴』

……？

いや、母さん。流石に、意味がよくわからなによ。何のこと？

僕は母さんの書き置きを無視して、朝食を食べ終えた。一旦部屋にもどり、カバンに教科書と管狐を放り入れる。

学校への道は退屈だ。コンクリートばかりで、植物が無い。たまに幽霊がいるけど、そいつらも僕には鬱陶しい。

それに、今田は「眞のことを調べないといけない」とい。眞が、あの写眞は僕も魅斗も心靈写真だと思つたけれど、ソフトウェアで解析してみないことにはわからない。それに、自分で描いた合成写眞に呪いを施した可能性もある。

教室にはいると、沙織ちゃんと田があつた。

「あ、依慈亞くん！」

明るい笑顔で僕を呼ぶ沙織ちゃんと、おもわずキョドつた。名前を呼ばれるのは慣れてない。

「あ、おはよ。」

あくしゃくしてないかな、とか思いながら挨拶を返す。沙織ちゃん

んは僕のところまで来た。

「写真のこと、なにかわかりましたか？」

「うん、少しね。まだ何とも言えないけど。……あ、そうだ。沙織ちゃん、借りてる写真、水族館で撮ったヤツがあつたよね？」

「え、んー、はい。確か。それがどうかしましたか？」

僕は自分の席に鞄を置く。沙織ちゃんも後を付いてくる。僕は席に着いた。

「いや、ちょっと調べに行こうと思つて。あの水族館、どこにあるの？」

「えっと、確か、駅で三つくらいに行つたところに。今度案内しましょうか？」

ふむ、どうしようか。沙織ちゃんみたいな可愛い子とデートできるなら文句はないけれど、彼氏でもない僕が沙織ちゃんを連れ回すつてのは、なんか気が引ける。いや、本当は全然気が引けないんだけど。

「うん、そうしてくれると嬉しいな。」

僕は沙織ちゃんにそう言った。

チャイムが鳴つたので、沙織ちゃんはそれじゃあと書いて席に戻つた。クラスメイト達も、ガタガタとうるさこ音を立てながら席に座つて行く。

担任が入ってきた。H.R.はすぐに終わつた。一時間H.R.は数学。

暇だ。

そう思つて、うつ伏せた。眠る。夢は見なかつた。

夢なんて見たことが無い。僕は人間じゃないんだし。夢を見るほど若者でもない。いや、割と若者なんだけどさ。

H.R.を見ました。時計を見ると、昼休みだつた。雨は上がつていた。一時間H.R.は9時に始まつて、今がちょうど1時。だいたい4時間。これで合計6時間睡眠だつた。人間の最低睡眠時間はこれくらいだったと言っていたような気がする。脳医学者じゃないので本当の

ところはわからないけれど。しかし、睡眠っていう行為そのものが靈的な意味を持つていて、以上は、必ずしも医学だけが重要ではない。

まあ、そんな講釈は置いておこう。

僕はノロノロと立ち上がる。鞄の中から財布を取り出して、教室を出た。

見たことの無い顔ばかりだ。そもそも、僕が覚えていた生徒なんて、魅斗と沙織ちゃん、それから琴音くらいのものだ。琴音は僕の幼馴染。

高校の外の知り合いはもう少しうるけど。

人外まで含めるともっといるな。

購買で焼きそばパンを買った。本当はカスタードパンが食べたい気分だったけど、売れ残りが焼きそばパンしかなかった。時計をもう一度ちゃんとみると、昼休みも半ば。なるほど、寝過ごしたらしい。つまり、カスタードパンは全て売ってしまったということ。

仕方無く買った焼きそばパンを手に、僕は教室に戻ろうと、歩き出した。

途中、女子生徒が裏庭で写真を撮っているのを見つけた。

写真部？ それか、写真が趣味か。どちらかかもしれない。写真部がこの学校にあるのかどうか、僕は知らないけれど、持っているカメラがそこらのデジカメではなかつた。プロのカメラマンが使つていそうなタイプのもの。やっぱり僕はカメラに詳しいわけじゃないので、その女子生徒が持つているカメラがそういう本格的なものなのかどうかはわからないけれど。

使えるかもしない。

そう思つた。僕は歩く方向を変えた。購買の隣の裏口を通つて外に出ると、校舎に沿つて歩き、角で右に曲がつた。そこが裏庭。

女子生徒はまだ写真を撮つていた。何を取つているのかは不明。木の枝にカメラを向けているように見える。まっすぐに下ろした髪は、型の辺りまで伸びていて、茶色に染められている。明るいブラウン。

「こんにちは。」

僕は彼女に話しかけた。

すると、彼女はビクリを肩を強張らせて、こちらを振り向いた。
「誰？ 足音を立てないで女の子に近づくなんて、さてはあなた、
変質者ね！」

「違う！ それは盛大なる誤解だ！」

思わず叫んだ。

「ん？ なんだ、違ったの。」

「初対面を変質者よばわりするなよー。」

「足音を立てないあなたが悪いのよ。」

断言されてしまった。いや、まあ、足音が無かつたのは、うん。
無意識なんだけどさ。

「まあいいわ。」

彼女は構えていたカメラを下ろして、体をこちらに向かって。
近付いてきて、じろじろと僕を眺めまわす。僕はなぜだか抵抗できなかつた。

完全に彼女のペース。

「何見てんの？」

「いや、写真のモデルに使えるかと思つて」

「いっ、パパラッチじゃない。本物の写真家だ。

「……いや、僕は撮らない方がいいよ？」

「なんで？」

「病気でね。写真に写らないんだ。」

そう言つと、彼女はあからさまに胡散臭そうな表情になる。何いつてんのこいつ頭大丈夫？ って聞こえてきそうだった。

「まあ、それもどうでもいいわ。どうせモデルになりそうにないし。

」

さらりと失礼なことを言つ彼女だつた。

「それで、私に何か用事？」

「うん、そう」

んー、何から話そうか。

心靈写真のこととか、言つても信じそつこないし。普通のひとこと話すとかなり変人扱いされそうな話ではある。

まあいいや。作り話のほうが面倒だし。

「実は今、心靈写真について調べてるんだけど。昂木沙織さん、知つてる？」

尋ねると彼女は首を振った。

「知らないわ。その子がどうかしたの？」

「その子を写真に撮ると、心靈写真が写るらしいんだよ。毎回じゃないんだけど、少なくない頻度で。」

「……心靈写真って言われても、私は写真解析の専門家じゃないわよ？ ただの写真好きな女子高生。写真の解析はお断りだわ。それに、心靈写真なんて信じられないし。」

まあ、普通は信じられないよな。心靈写真のことなんて、その存在を確信している僕でさえ、それが大抵の場合はまがいものであることには賛同しているくらいだし。

「まあ、そこは置いて置いてくれ。それにも、心靈写真の解析を頼もうと思つてるわけじゃない。……去年のキャンプの時、君はそのカメラで写真を撮つたんじゃないかな？」

「ええ、撮つたわね。友達がほとんどだけど、みんなが歩いている風景とか、いろいろ。……まさかあなた、私が撮つた写真から心靈写真を探そつて言つうの？」

「そのままかだよ。」

写真家の少女は呆れた表情になる。

「そんな写真があつたら私が気付くに決まってるでしょう。わざわざあなたに写真を見せたりしないわ」

「そうかもしだれないね。でも、君はさつき自分で言つた通り、写真解析の専門家じゃない。」

彼女はそこで言葉につまる。

「確かに君は君自身が撮影した写真全てを記憶しているだろう。す

べてを思い浮かべることができたのだろうね。それは間違えないとと思う。君の[写真]に対する思い入れは、初対面の僕にでも窺い知れる。

けれど、君は[写真]解析の専門家じやない。君の撮影した[写真]全てが心靈[写真]で無いとは、断言できないんじゃないかな?」

「それは……確かに。そうね。でも、あなたはどうなのよ? [写真]解析の専門家だ、とでも言うの?」

「いいや、違う」

僕は断言する。

「だったら、あなたが私に声をかけた理由がわからないわ。[写真]が目当てじゃないんでしょう?」

「それも違う。僕が君に声をかけたのは、君の[写真]を見せて欲しいからだ。できれば、学校専属のカメラマンが撮影した写真も調べたけれど、それは後回し。まず、君の撮影した写真すべてを調べて、心靈[写真]を選びだす。それが、ヒントになると想つんだ。」「ヒント? ……?」

「そう、ヒント。帚木沙織を撮影した時に頻繁に心靈[写真]が[写る]原因を探るヒントだ。」

「……ちょっと待つて、なんだかおかしくない?」

彼女は眉間に皺を寄せた。

「あなたの話を聞いてると、まるで、心靈[写真]がたくさんあるとでも思つてるようを感じるわ。でも、心靈[写真]なんて撮れる方が珍しいじゃない。」

そのとおりではあるけれど、本当は違う。

心靈[写真]はどこにでもある。ただ、普通の視力で見てもわかるほどに幽靈が鮮明に映つた心靈[写真]が少ないだけだ。

「それは、少し説明が面倒なんだよね。」

説明は簡単なのだけれど、わかつてもらうのが面倒だ。

「とにかく、君が撮影した[写真]を見せてくれないかな?」

「見せてくれもなにも、いくらでも見せるわよ。部室に行けば、他の人が撮った[写真]もあるし。」

「……部屋？」

「セツよ。」

彼女は胸を張つて言った。

「私は宇都宮茉莉。写真部よ。」

やつぱり写真部つてあつたんだね。

心靈写真／心写靈真 肆

心靈写真／心写靈真

肆

この高校の写真部は名門らしい。その自慢話を、放課後になつて写真部の部室に案内される間、ずっとと聞かされていた。わけのわからない調査のためとはいへ、そう言った話を聞いてくれるのがうれしいらしい。宇都宮さんは（この少女を下の名前で呼ぶのはなんだか抵抗がある。）楽しそうにそれらを話していた。

去年写真部に在籍していた先輩が、かなりすご腕だつたらしい。プロのカメラマンとして将来活躍するだろうと言っていたとか。その先輩がどれほどすごかつたか、ということを聞かされた。

写真部の部室に着いた。彼女はポケットから取り出した鍵で、部室のドアを開けた。部室は、写真部専用に割り当てられているみたいだ。部活棟の一階にあった。

「鍵、君が持ってるの？」

「そうよ。だって、私が部長だもの。」

宇都宮さんは一年生だから、三年生はいないということかもしれない。二年生を差し置いて一年生が部長を務めると言つこともあるけれど。

「とにかく入つて。」

先に部室に入つて行つた宇都宮さんに促される。僕は埃っぽい部屋に足を踏み入れた。

パチ、と言つ音がして、電気が付く。中は割と整頓されていた。真ん中に長机が二つと、パイプ椅子が全部で五つ。奥は窓だけれど、カーテンが閉められていた。入口から向かって右側には棚があり、ファイルが収められている。

宇都宮さんはパイプ椅子を一つ引いた。座れという意味だらう。

僕はそこに座る。

彼女は棚から一冊のファイルを選んで、僕の前に置いた。

「これ、私が撮った写真。あなたが見たがってる、去年のキャンプの時のものよ。心靈写真は写つてないと思うけど。」

「そうかもしない。とにかく、調べてみるよ。」

ファイルと思つたそれは、アルバムだつた。プラスチックのカバーだから、見分けがつかなかつた。

パラパラとページを捲つて行く。宇都宮さんに見せてもらつてのんだから、あんまりじっくり調べるわけにもいかないかと思つた。ざつと読み終わつた。

「キャンプの分はこれだけ？」

「ん？　ええ、そうよ。他の行事の分も見る？」

どうしようか。見た方が参考にはなるけど、もう大体分かつた。というより、むしろわからないことが増えたんだけど。

「んー、いや、もう大丈夫だよ。写り込んでるものも大体分かつたし。調べたいことは調べれた。」

「ほんとに？　眺めてただけじゃない。」

「眺めてただけだけど、眺めればわかることもあるのさ。」

さて、これからどうしようかな。僕はとりあえずファイルを閉じた。表紙には『H十九年　一年キャンプ』と手書きで書かれていた。写真を眺めていてわかつたことは一つ。

心靈写真の発生にバラつきがあること。それから、数回だけど帚木沙織が写つっていた写真があり、それらは誰が見ても分かるような心靈写真じゃなかつたこと。

これから分かることは二つ。ひとつはキャンプ場が靈的な要素を持つていたかもしれないということ。もう一つは、帚木沙織を撮影すれば必ず心靈写真になるわけではない、ということ。

前者の結論はどうでも良い。しかし、帚木沙織の写真が全て心靈写真ではないということは、かなり重要だ。

彼女に引かれた幽霊たちは、何らかの理由で彼女に憑けずにはいるということ。

幽霊吸着体質は、本質的には幽霊に対してもらかの反応をする体质か、幽霊に対してもらえない幽霊たちは、自分と接点を持つ存在に誰にも反応してもらえない幽霊たちは、自分と接点を持つ存在に必ず引かれる。そして、その存在の傍にいようとすると。

恋人に依存するようなものだ。

つまり、こんな風に靈が纏わり付いて離れない状態を、靈に憑かれたと形容するわけだ。

帚木沙織が幽霊に憑かれていないとすることは、帚木沙織は幽霊吸着体质ではないということになる。それなのに、彼女を撮影するとの写真が心霊写真になる頻度がかなり高い。一生心霊写真らしい心霊写真を撮影しない人間が存在することを考えると、間違えて恐ろしく高い確率だ。

何か原因がある。

「……あの、依喪くん？」

気まずそうに話しかけてきた宇都宮さん。そうだ、ここ、写真部の部室だった。

「ん？　ああ、ごめん。邪魔だったね。すぐ出でくよ。」

僕はそう言って、席を立とうとする。

「違う。別に邪魔なんて言つてないでしょ。やつじやなくて、写真の感想が聞きたいの」

「ああ、なるほど。」

そうか、彼女はそういう種類の人間だった。

何と言つたものか。ここでまたファイルを開けば、それは写真をよく見てませんでした、と言つているようなものだ。けれど、事実良く見ていない。適当な答えだと、嫌な気分にさせるかもしね。写真そのものは、よくわからないな。でも、よく撮れたと思うよ。写つてる人がみんな楽しそうだ。楽しかったんだろうけど、そう言う意味じゃなくて、楽しそうに写真に写つてる。」

当たり障りがない程度に、正直な感想を言った。

「素敵な写真だと思うよ。」

「ほ、本当?」

「本当。僕は写真評論家じゃないから、詳しいことは言えないけどね。良い写真だと思う。」

宇都宮さんは本当にうれしそうに笑った。ファイルを棚に戻す。「私ね」彼女は僕に背を向けたまま言った。「写真って好きなの。……いや、知ってる。

彼女が何を言いたいのか僕にはわからない。

振り返つて、僕の正面に座る。手には別のファイル、……というよりも、小さなアルバムのようなものがあった。

僕にそれを差し出す。

受け取つて、中を開いた。一つの頁に、二つの写真が入っている。パラパラとめくる。どれも、風景や小物を写した写真だった。人は、映つたとしても体の一部や、影。けれど、どれも生活感にあふれた写真だった。

何だろう。

そこにきちんと人が生きている。それが、写真になつている。どうやつたらこんな写真が撮れるのか、不思議なくらいだ。人を写さずに入を映す、とでも言えばいいのだろうか。

「この写真は、宇都宮さんが撮つたの?」

僕は写真から目を離さずに尋ねた。めぐればめぐるほど、少しづつ感動できる。

「違うわ。去年卒業した先輩の。」

「ああ、なるほど。僕は納得した。」

「その写真は直接公開したものじゃないんだけどね。その人はそんな写真が好きだったのよ。」

「…………」

唐突に始まつた独白のような言葉に、僕は何も言わなかつた。

「私もそのひとみたいに、自分で好きだって言えるような写真を撮

りたいと思つてゐる。」

好きな絵を描きたい。

好きな音楽を奏でたい。

好きな詩歌を歌いたい。

好きな小説を書きたい。

好きな学問を学びたい。

好きなプログラムを組み上げたい。

好きに作りたい、それができないことの、何という苦しさ。

「でも、私には今のところ、撮りたい写真なんて全く無いのよ。撮りたいと思う瞬間が全くない。」

「……写真、好きなのに？」

「好きよ。好きだけど、好きなのは写真なの。きっと私は、不純なのよ。写真を撮ることが好きだけど、撮りたいものがあるから写真を取つているんじゃないわ。」

手段が目的になつてしまつて、元の目的が紛失する。記録するという目的のために写真を撮るという手段を用いるのが、自然だ。けれど、写真を撮ること自体が目的になつていても、それが芸術だろう？

それは、表現の形だろう？

「私には撮りたいものがわからない。」

色の無い絵画。

旋律の無い音楽。

言葉の無い詩歌。

文脈の無い小説。

目的の無い学問。

解決すべき問題の無いプログラム。

「写したいものがなければ、やめるのかい？」 とりたいものが見つからなければ、「写真を撮らないのかい？」

「……いいえ、そう言うわけじゃないわ。」

彼女はそう言って笑つた。

「ただ聞いてほしかつただけよ。ここ、今、私一人だから。」

三年生どころじゃなかつた。一年生も一年生も、全くいないのか。
まさか彼女一人だとは思わなかつた。

でも、だからつて。

寂しそうな顔をしないでくれよ。

「でも、良いじやん。宇都宮さん、写真、好きなんだろ？　だつたら、好きなことを好きにすれば良い。」

「うん、そうね。今も好きにしてる。好きに写真を撮つて、好きに現像して、好きに楽しんで、また好きに写真を撮つてる。でも、一度も、私の写真に満足したことがないのよ。それが残念。」

「……満足、つて言つけれど、そもそも、自分の作品に満足できる創作家なんてそつそつといなと思うよ？　自分の作品を最高傑作だつて言う小説家は、どう考へてもただの馬鹿だ。求め続けるから、もつともつといいものを作りつとするんじやないかな？」

「求め続けるから……」

「そう。満たされないから求め続ける。天才ってのは孤独なんだよ。

「天才だけが孤独だとは限らないけれど。

けれど少なくとも僕は、天才をそういうた概念だと定義する。自分の中の欲求を一つの方向にだけ向けることができる愚直さは、持つていなければならぬ。

「天才には一種類の意味がある。ひとつは絶対に他人にはまねできないような卓越した能力を持つている存在。もう一つは、絶対に他人が妥協するような事に妥協しない存在。前者はどこにでもいるけれど、後者はなかなかない。」

「……ずいぶんと断言的なセリフね。」

彼女はむしろ呆れていた。良かつた。寂しそうな表情はしてほしくない。苦手だから。

「事実だからね。まあ、でも、この写真を撮つた人が、君の尊敬する先輩がどんな人なのかは知らないけれど、写真は能力じやなくて

感性とこだわりだろう? だったらおそらく、彼は後者の天才だったはずだ。つまり、はじめからの天才じゃない、努力して成った天才。

「

まあ、本当はその先輩のことなんて、全く何一つしらないんだけれども。

「だから、宇都宮さんも、写真にこだわり続けるなら、いつか良いものが撮れるよ。君が納得できなくても、僕が素敵だと思うような作品が撮れる。今でも十分素敵な写真だと思うしね。」

「うん。ありがとう。」

宇都宮さんは笑った。

「どういたしまして。」

僕はおどけて両手を広げた。それから、アルバムを返す。部室を出ると、彼女も付いてきた。

「もう帰るの?」

「うん、そう。ほんと倉庫みたいに使ってるからね。ここに居ても仕方ないのよ。」

なるほど。道理で埃っぽい空気がしたわけだ。

鞄を取りに校舎に戻った。宇都宮さんは隣のクラスだった。学校指定の通学鞄と、カメラが入ってるのか、大きめの別の鞄を持って、出てきた。

「一緒に帰つてもいい?」

「別に良いけど、家どこ?」

宇都宮さんが告げた地名は、僕の家の近くだった。学校から歩いていくける距離。

僕たちは結局、一人で一緒に帰った。

「あなた、なんで心靈写真のことなんて調べてるのよ?」

「ん? いや、頼まれごとでね。僕が頼まれたわけじゃないんだけど、巻き込まれちゃったんだよ。」

宇都宮さんは首を傾げる。しかし、すぐに切り替えた。

「誰に頼まれたの?」

「帚木沙織さん。心靈写真が少くない頻度で写る女の子。これは昼休みに話したよね？」

「そういうえば言つてたかも。でも、その写真、本物なの？ その子が加工してそう見せかけてるんじゃなくつて？」

「それは無いよ。というより、今のところ本物だと思つてる。その辺の調査はもう一人がやつてくれてると思うから大丈夫だよ。」 魅斗の方が顔が広いし。もともとあいつが引き受けた依頼なんだから、それくらいはやつてるだろう。やつて無かつたら一週間分、昼食を奢つてもらう。

「ふうん。そういうオカルトな話、本当にあるんだね」

「いや、どうかな。普通は、こう言つ話は嘘つぱちだよ。表に出でるような話は大抵が紛いものだ。」

「そうなの？」

「そうだよ。有名な心靈スポットとか、そんものは大抵ね。だつて、人が何人も出入りするような場所に、わざわざ彼らが住む筈がない。」

「幽靈は別だけれど。基本的に妖怪たちは、社会に溶け込んで生きているか、もしくは、そこから離れているか。もちろん、今でも呪いに利用されたり、悪い物によつていく者もいるけれど。」

「ねえ、不思議なんだけどさ。依頼くんつて何者？『写真に写らなければ』って言つてたけど、もしかして本当なの？」

「ん？ ああ、本当だよ。鏡にも写らない。」

「……どうして？」

「そういうものさ。僕の場合、君が見ているだけなんだよ。存在の証拠が残らないようになつてるんだ。」

太陽に焼かれない突然変種の吸血鬼。

それが僕だ。

程なくして宇都宮さんと別れ、僕は家に帰った。そのころにはすでに太陽は沈んでいた。

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

リビングから母さんの声が聞こえた。母さんは吸血鬼じゃない。吸血鬼は基本的に子供を作る能力を持たないから、母さんが吸血鬼だと僕が生まれなかつたことになる。

「晩御飯、できてるわよ。」

「うん、今行くよ。」

そう言って、一階に上がった。鞄を置いて、管狐の管を取り出す。狐は増えていた。

僕は一階に降りた。リビングから花鉢の声が聞こえる。

心靈写眞／心写靈眞 伍

心靈写眞／心写靈眞

伍

日曜日。駅三つ離れた場所にある巨大な建物を前に、僕は一人で立ち尽くしていた。

でかい。

めちゃくちゃでかい。

水族館と思っていたけれど、そうではなかつたらしい。美術館・水族館・植物園・博物館。さまざまな創作品が集まっている、巨大過ぎる建造物だった。

なんつーもんを作るんだ。

「よ、依喪くん！」

ビクリ、と肩が強張る。今日は沙織ちゃんが下の名前で僕を呼ぶ。特に理由は追及していない。追及したくない。下の名前で呼ばれることに全く免疫がない僕はいちいち過剰反応してしまつ。あ、魅斗は別だ。

「中に入るよ？ 入場券買つたから。」

「あ、うん。じゃあ、行こうか。」

沙織ちゃんに腕を引かれた。
ゾクリ、

目眩がする。

離れろ、本能が警告した。

僕はとつさに沙織ちゃんの手を振りほどぐ。

「きや！ ……どうしたの？」

「あ、いや。なんでもない。大丈夫？」

今は、

何だ？

吸い取られそうな感触だった。

……いや、大丈夫。何でもない。僕はそう思った。疲れてるだけだ。最近、血を飲んでいないから。

僕たちは建物の中に入った。

入口すぐのエリアは、案内用らしい。各階になにが展示してあるかが巨大なディスプレイや、精錬されたデザインのメッセージで示されている。

僕たちは三階の『海の恵み』エリアに行つた。エレベーターで登る途中、お年寄りの夫婦が入つてきた。

僕は入口近くに居たので道を空けた。

「ありがとうね。」

二人は僕にそう言った。それから、三階に着いて僕たちはエレベータを降りた。

「年をとつても仲良しって素敵だね。」

沙織ちゃんがそう言った。確かに、長い間ずっと仲良くできるといふのは、素敵だ。

それには憧れる。けれど、僕にはそういうパートナーはできないだろう。

吸血鬼は年を取らない。僕は永遠に、一六歳だ。

「ここが水族館。前の彼氏と来たところなんだよ。」

「そうだつたんだ。ああ、そう言えば。写真は男の子と一緒に写つてたね。」

僕たちは床の矢印に従つて歩いてゆく。薄暗い館内。壁に小さな水槽がいくつも埋め込まれている。それぞれの水槽はライトアップされていて、幻想的な雰囲気を醸し出していた。

「綺麗だね。」

「でしょう？ 私、ここが凄く好きなんだ。毎週かなうず来てるの。彼氏とのデートも、ここばかり。」

「へえ……。それじゃあ、写真も毎回撮つてたの？」

「そうだよ？まあ、毎回つてほびじやなかつたんだけどね。」

そんな会話をしながら、展示されている生き物を眺めて行く。海の中にしか住めない生き物を、箱庭の中に閉じ込めて。もし海の中に入間のような知的生命体がいたなら、空氣の水槽を作つて人間を閉じ込めただろうか？

陸の生き物、とでも銘打つて。博物館を建てただろうか。

水の泡の中に居るこの生き物たちはどんな気持ちだろう？

半透明のクラゲ。様々な体色の熱帶魚。日本にしか見られない魚。イソギンチャクやエビ。無数の生命が閉じ込められていた。

いくつかの部屋を抜けて、最後に到着したのが、縦に伸びる巨大な水槽だった。沙織ちゃんから借りている写真の撮影場所。

水槽の中には鮫やウミガメなんかの巨大な生き物をはじめ、小さな生き物も数多かったです。海の一部をそのまま切り抜いてきたような水槽だった。他の小さな水槽とは違っている。

「ねえ、依喪くん。写真撮らない？」

「……いや、写真は苦手なんだよ。」

まさか、写真に写らないとは言えないし。宇都宮さんの時は、まあ、特別だ。

「えー。可愛い女の子が一緒に撮らうって言つてるんだよ？　だめ？」

「ダメ。」

「けちー」

沙織ちゃんは頬を膨らませた。いや、そんなことされても困るんだけど。

「ま、いいや。それよりお腹すいけりつたので、レストランに行こう。」

「レストラン？　この中にあるの？」

「うん、そうですよ。一階にちゃんとある。やっぱりお腹空くからね。お土産屋さんなんかも、一階。」

「へえ。よくもまあ、そこまで何でも揃えたね。」

「世界の名物を食べられるんだよ。おこしゃれいつも好奇心を満たしてくれるレストランなのです。」

なんつーコンセプトだ。そう思いながら、僕たちは再び一階に戻る。

水が多かったのに、幽霊は一匹もいなかつたな。そう思いながら、僕は沙織ちゃんに案内されて、レストランに入った。

適当にメニューを決めて、それを告げる。

「えへへ。」

ウエイトレスがメニューを下げてから、沙織ちゃんがうれしそうに笑った。

「なんだかデートみたい。」

そう言えば、僕に対する言葉づかいがだいぶ変わっている。そうか、そういう認識だったのか。

……いや、血を吸うのはやめた方が良い。どうせ吸いすぎて殺してしまうのが落ちだ。

食事を終えてから、今度は四階の植物園に行くことになった。そこは、造られた森の中を歩くようなデザインになっていた。縦横無尽にめぐる立体的な道を、植物を観賞しながら歩く。

「ねえ、依喪くん。私しか知らない場所、教えてあげる」

「え？」

「こつち。ここから、奥に入るの。」

沙織ちゃんはそう言つて、道ではない場所に入つて行つた。僕はあわてて後を追う。

そこは作られた森の一角で、確かに奥が隠れていそうな場所ではあつた。ちょうど大きな木が邪魔で、その奥が見えない。

ここが、迷宮の入口だと知らずに、僕はそこに入つて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2503f/>

件の九段

2010年10月9日21時14分発行